

尾張藩の切支丹類族の取締

柴田亮

一

切支丹宗門の禁壓は徳川幕府の重要政策であることは、云ふまでもないことであるが、其の根絶には全國的に、歩調を合せて取締を要するのであるから、幕府は各藩に類族帳の呈出を求め、此を基底と爲して切支丹取締の方針を得たのであつた。それが尾張藩に於ては如何なるものであつたかは寛文五年以前のもは充分には知り得ないのであるが、其の後のものに就いては、尾濃葉栗見聞集所載寛文五年正月晦日の指令にて知り得るのであつて、「一、此前吉利支丹にてころひ有之者候はゞ何年已前よりころひ申との儀又は先祖の内に右之宗門有之者は其の身類門にて無之候とも委細遂穿鑿申遣候様に可仕、外より指候はゞ申分雖有越度可有之事、一近年令露顯切支丹或は斬罪或は籠死或は籠者にて罷在者之妻子下人類門にて無之候共委細遂穿鑿申遣候様可仕候人數少なき村々には書付にて可掲出候事、一右宗門近年輕き者は雖令露顯此をも弘る幾里支丹は不出候、すゝめをも致候程の者深く隠

有之并寄物木尊様をも隠置候之者可有之候間入替、遂穿鑿候様にと急度可申付事、付宗門訴人の輩は此已前より御意之通御褒美可被下候、從公儀被仰出候事、右之條條御家中並御領分中被仰出候間町人百姓は五人組を定め町年寄庄屋無油斷改之面々召仕之者に至る迄堅遂穿鑿不審成者於有之者、頭有之輩は其の頭迄早速相違其頭横井十郎左衛門山田治太夫へ可申届、頭無之輩は右兩人之處迄可申事 以上寛文五年正月晦日」とあつて此が「從公議仰出」のものであり、恐らく憲教類典に見らるる寛文四年十一月二十五日「口上之覺」の大名旗本に特に役人をもうけて取締を令したのと直接關聯を持つのであるが、尾藩に於ては此の取締方法が余程具體的に示されてゐるのであつた。これは一般の宗門改をも「當年より毎年二月中旬十一月中旬兩度」も「手形を取」らねばならぬ様な状態の時であつたのであるからであらう。此の時の類族帳の一端は愛知縣丹羽郡高木村の切支丹關係文書(史苑第五卷二號拙稿)に依つて知る事が出来るのであるが、其は親兄弟子供と召使の家族内のものに限られてゐるようで「先祖の内に右之宗門有之者は其の身類門にて無之候とも委細遂穿鑿」とは一般には此の範圍に留るものであつたやうである。そして「丹羽郡高木村御赦免被成罷り候百姓」に依つて見るのに其が寛文元年の僉議書を基として記されたものであり(同上拙稿一九頁)此が類族帳の形式を略傳へてゐた事が察知し得るのである。然し類族の範圍は、幕府に於ても未だ其の八年後の寛文十三年にも規定されてゐなかつたのであらうか、享保集成絲綸錄の「耶蘇宗門にさゝれ親死候其子御預之

者國所其者之年近き親類縁者可被書付事」と漠然と書れてゐるに過いのである。ところが史事隨筆「貞享四年卯七月五日江戸より來候書付之由に而寺社奉行より請取候」書狀には「一江戸帳本人類族之者親兄弟、伯父伯母甥姪從弟夫妻夫々、父母祖父母曾祖父母高祖父母、嫡孫末孫曾孫玄孫等男委細に吟味有之候而可被書出候、但會祖父母高祖父母之方は書出に不及會孫玄孫娘は書出に不及事」とあり「覺 切支丹宗門改之儀ニ付忌掛り候親類とハ從弟迄之儀ニ候但本人ころひ候以後之子ハ從弟ハ書付ニ不及、ころはさる以前之子は本人と同然の儀に候間右之趣早速相改帳面ニ被注可被指出候」とあつて、類族が如何なるものであつたか知れるのであるが、此の江戸よりの書は憲教類典四ノ十六に見る同年六月のものと、直接關聯のあるものであることは、兩者の記載事項や、其の文章に依つても察せらるるのであるが、此の書には單に「類族之者忌掛り候親類並吟味有之て書付可被申候此外は不及書付」とあるのみである。然し此は單に知り得たる範圍の幕府の記錄に、此の類族の範圍が書記山澄將員成瀬氏に渡されたもの、覺書に「延寶二寅之六月書出候幾利支丹本人又は類族縁者共之儀無異議罷在候哉委細被遂吟味書記以判形之書付御申聞可有事」とあり、忌掛り候親類又は縁者と云ふものが、類族と區別して書れてゐるのは、矢張り類族とは一家族を示すに限られてゐた爲でなからうか。そして此に「延寶二寅之六月書出候」とあるところを見ると幕府に保存されてゐる類族縁者帳と

も云ふべきものは、十三年以前のものであつた事が察せらるゝのである。其の八年後にあたる憲教類典四ノ十六に見る元祿八年六月の條には、此の類族の範圍、に入る可きものゝ細則を見るのであつて「忌掛り候親類」と稱して何處までも忌掛りとすべきが曖昧模糊たるものがあつたのを、一律に類族の中に包攝して類族の範圍を始めて明確にしてゐるものの如くであり「父母不轉以前之子は男女共に本人同前也孫より男段々續候時は耳孫迄類族に可入」などゝあるのであるが、此の法規の記録は尾張藩に於て見出されてゐないが、これに依つて類族が規定されてゐた事は云ふまでもないことであらう。然るに凡そ三十年後の享保十年二月の、吏事隨筆の記事に「古切支丹類族之儀、前々より本人并本人同前之末類玄孫迄類族に書中候右曾孫玄孫之儀向後女之分は類族を離れ平人に罷成候條只今類族に御書出候曾孫玄孫女帳面に御書立當年中に當役所に御指出可有之候此以後曾孫女玄孫女出生致し候節當役所へ御達に及不申候、本人並本人同前之曾孫男玄孫之儀男に女に差別有之候類族に罷成候者有之、又は類族に不出平人に罷成候者も有之候間只今迄之通御心得曾孫男玄孫出生之節には當役所ニ御達可有之吟味之上類族に書候者有類族に不書平人に罷成候者之指圖其節に可申談候、一類族縁續之者類族には不相立候得とも平人之限には取扱がたき者共其外異變有之候節は只今迄當役所へ御斷を請置候右談之者異變之節當役所ニ御達ニ不及者も可有之候御沙汰之類族帳面委細御寫來ル四月中ニ當役所ニ御指出可有之候其上にて猶又遂吟味末々にて取扱かひも有之間敷者共ハ向後役所へ御斷

不及様可申談候」とあつて、類族を玄孫迄とするのは、其の間に法規の變更が有つた譯ではなからうから、此の場合に律すべき類族が「孫より男段々續」くものではなく、其の後に女を含むところのものであつた爲に、斯く書かれるに到つたものであつたかも知れないのであるが、實際法規を運用する場合には、上司の指圖を待たねばならず、類族以外の縁續のものにも、監視の目が向けられてゐたものであることが了解される。

二

此の類族の範圍を明らかにした貞享四年には幕府に於ては、類族帳を完備させる爲に「類族之者果候ハバ死骸等遂吟味別條於無之は旦那寺ニ而取置之、其趣を帳面に記、毎年七月十二月兩度に切支丹奉行江差出帳面除かせ可被申事」とあり、此が八年後の元祿八年には「二季之届」と稱して死亡の他に出生縁組旅行等も申告せしめた事が、憲教類典四ノ十六にて知り得るのであるが、尾藩の類族帳が幕府に齎されてゐたことを示す現存の記事では、吏事隨筆に、貞享四年に先だつこと、十三年前の延寶二寅年の記事として「右牢舎者(寛文七年召捕の者)之内御吟味有之、高力七兵衛取扱にて牢舎御赦免村々へ御預此節御國方施行金の内にて壹人ニ貳三兩宛被下、一右宗門之者共改帳六月十九日之日付にて、江戸へ御指下渡邊大隅守殿青木遠江守殿へ御指出之由にて右帳面同四年十月寺社奉行より來」とあることであつて、此は幕府が其の前年寛文十三年に「從先年被預置候耶蘇宗門之者不殘書

記之、國所其者之年ちかき親類縁者可被書付事」とあり、右書付は「從先年耶蘇宗門之者領内に預り置き候面々に斗被遣候」とある、大成令四三に見る事實に關聯するものである事が察せらるゝのであつて、類族帳の完備すると共に尾張藩に於ては村預になつたものであらう。此等の者が大成令の上述の箇處に「御預之内耶蘇宗門不分明者ころひ候者并訴人何人いたし御赦免之者」とあるものに相應するものであらうが、尾張藩に於ては此の際赦免されたものはたゞ單に轉宗したものでなく、進んで白に及んだものに限る、情狀酌量されたのであらうか「己方より宗旨白狀仕御赦免被成所へ遣候者之覺」とあることであつる。此者は十三年後に老中よりの申達によつて、「延寶二寅之六月書出候幾利支丹又類縁者に異議」なきかを尋ね、此の調べが江戸に送られた事は、古義に「貞享四卯年(親)族帳面相改書出有之、但公議向後書付御國方根居帳之儘に有之」とある事にて知れるが、其の又三十七年後の享保十年の項に「類族帳面江戸へ出て候儀ニ付御代官手代江戸に下事」とあつて一定の期間をもちて類族帳が呈出されたものでなさうである。貞享四年四月の吏事隨筆の「自今以後は右帳面之者相果候へば其時早速御申聞可有之」とあるが此を同じ貞享四年六月の幕府の令と比較すると「類族之者果候へば死骸等遂吟味其趣を帳面に記、毎年七月十二月兩度切支丹奉行へ差出帳面除せ被申事」とあり、一は早速の届出、一は二季の届となつてゐるのは、前者は幕令に多少の修整を加へて藩中に布告したものであつた爲であらう。幕府が類族帳の呈出を求めた始めは、延寶二年よりすれば

十五年以前の萬治元年に於て、幕府切支丹奉行井上筑後守の時代の「御預之者親類書知候は書付可被差上候事」とあることに依つて知り得るのである。然し斯の如き類族帳の製作は、潜める切支丹を搜索し、其の源に於て此を剪除せんとするに最も適切なものであり、此の様な事情は契利斯督記に「ヲット吉利支丹ニテ女房ノ事、獨子吉利支丹ニテ親事、父母吉利支丹ニテ子ノ事、又大形ナカ七八マデハ吉利支丹ニテ有之候事」とあることにも知れるが、此の様な點は既に早くより氣附かれてゐたであらうから、疑ひと監視の目は常に彼等の上に加へられて居り、たゞ此が時の經過と共に檢舉の合理化し、組織化されて法規にまで發展するに到つたものと見こよるからう。それ故に法規布告の存する否にかゝらず類族帳に類似せるものはすでに存在し得たであらう。

三

切支丹の取調べは正保年間に於ては、知り得たところでは、總べて江戸に送られてゐるが、寛文元年には切支丹奉行、同五年以後には寺社奉行に於て爲されてゐるのであつて、此については史苑第十卷第二號に述べたのがあるから省略するとして、古義類族に「一、寛文七末年先々切支丹宗門之者共七百四十五人他に乳呑子十四人十一月二十八日召捕入牢申付、右召捕候節御代官十人組手代御足輕被越候 一、延寶二寅年右牢舎之内御吟味高力七兵衛取扱にて牢舎御免村々へ御預」とあつて、村預になつたのであるが此の時の注意書とも稱すべきもので先にも表題だけを示した「己方より宗旨白狀仕

御赦免被成所へ被遣候者之覺」と云ふものがあるから以下に比を示そう。一、右御赦免之者五人組仕且那寺も頼候儀不苦候間組合之連判並寺判も可仕候事、一、右御赦免之者共、只今迄ハ所ニ御預置被成候共、自今以後ハ急度御預ケハ無之候自然住所を替候ハ其御斷可申候事、一、右御赦免之者於其村中奉公仕候儀不苦候間召仕候者は心次第ニ仕置可申事、一、右之者共如前々其所ニ可被指置候勿論他所不參候様被仰付以上」。此を見て感ずる事は實際に於て切支丹並類族として世に嫌忌されたものとの五人組の構成が如何に爲されたものか、寺院との關係に就いては、此より先、寛文六年八月六日の留書方留に「名古屋巾下東本願寺宗法藏寺義吉利支丹類内之所縁有之者寺手形致シ遣シ代々且那之由文言ニ偽ヲ書載旁不届ニ附、法藏寺并妻子供ニ御領分中内追放被仰付之」とある如き例も有り、此際は公計されたものと云へ、彼等五人組及寺院に責任が無い譯ではないのであつて、此の組合については「一、右組合之内御赦免之者誰儀は自今以後宗旨立あかり候様子及見及聞候ハ早速御奉行所ニ疑數儀被存、御斷不申上脇より相知候ハ連判之者曲事に可被仰付候」とあり寺院に於ては「一、右誰儀は今度御穿鑿ニ付幾利支丹之由己方より申出宗門ころひ御赦免被成下候付拙僧且那ニ仕寺判出シ候、右之者自今以後宗旨立あかり候様子見及、及聞候ハ早速御斷可申上候疑數儀被存御斷不申上脇より相知候ハ拙僧越度可被仰付候、爲後日仍如件、年號 支月日」と吏事隨筆にあることに依つても察せらるゝのである。貞享四年には延寶二年書出の切支丹と類族のもの、「他所に引越候類之儀ハ

彌其子細此所へ御聞差圖次第御申付可有候御國ニ罷在候者之儀も在所正數何時ニ而も相尋候節早速相知候様ニ御心得可有候。先年被仰出候通、右帳面之者共之儀今以無別儀平人並之事ニハ候得共不埒有之故右之通ニ候趣重遣不仕候様御申聞可有候」とあつて、居を移す場合にも届出を怠るものが絶えなかつたのであらう。此の様なもの、實例とその記録は殆んど持合せてゐないが、たゞ寺社方留寛文六年十一月十九日の記事に「大道寺孫兵衛^{御先手頭}御預り御足輕屋敷ニ家ヲ借り罷在候勘四郎ト申者吉利支丹類門之縁者有之者ヲ致女房ニ罷在并借屋諸狀ニ請人無之候處謀判仕請人判形之由僞申立候義共相顯今日磔ニ懸ル」とあることであつて、彼等が類族としての宿命に弄れる悲劇は決して少なくはなかつたであらう。否類族取締の法規の加増されるのは其に依つて取締の限界が示され、無用の恐怖をさけ得ると云ふ一面も有るとも考へられなくはないが、其にも増して法現の一句は直に十重二十重の縛繩となつて、彼等の生活を拘束するものであつたに違ひない。吏事隨筆所載の貞享四年七月五日の江戸より來つた類族の處置に關するものは從來のものよりも精細の度を加へたものであつて「覺、一江戸帳面者之内前々切支丹宗門之者にて、ころひ候以後御免被成在所へ歸候者何ニても面々誠を仕罷在候哉、其譯委細ニ書付可被指出事、一、最初切支丹ニ而ころひ不申以前之子、ころひ候以後之子、其譯委細吟味有之候而書付可被指出事、一、前々切支丹ころひ候以後何宗旨ニ罷成、常々且那寺へ參詣仕候哉、其寺へ付屈常躰ニ仕候哉珠數等をも持、父母之忌日ニ寺へも參又ハ持佛などをもかまへ香華

をも備へ候哉、其趣日那寺儘ニ遂詮儀、又は下人等を召仕候者有之候はゞ其下々迄入念穿鑿可被致候所々庄屋并宗門組合之者等迄も可被致候其上ニ而委細書付を以可被申聞事、一、親切支丹ニ而ころひ不申候之子共之儀も穿鑿等右可爲同然事、一、江戸帳本人類族者、親子兄弟伯父伯母甥姪從弟夫妻夫々父母、祖父母、曾祖父母、高祖父母、嫡孫、末孫曾孫、玄孫、甥舅、委細ニ吟味有之候而可被書出候。但曾祖父母高祖父母之方ハ書出ニ不及曾孫玄孫娘方ハ書出ニ不及事、一、本人ハ不及申類族之者等迄他國へ指放遣候儀堅可爲無用候、但參候而ハ不仕譯有ハ其子細委細ニ書付寺社奉行相違可被仕差圖事、一、江戸帳面之者本人類族共欠落等仕候ハ、早速可被申聞候趣急度相觸出候様ニ可申付候并本人類族之者相果等候ハ、不取置して指置、寺社奉行ニ早速被申越候。御藏入ハ御代官并十人組立合死骸遂吟味本人之分ハ死骸鹽詰ニ仕指置差圖次第ニ可被仕候、類族之死骸ハ鹽詰ニ不及、差圖次第可被仕事、右之趣早速相改帳面ニ被注可被差出候以上 卯七月五日」とあり、此の如き取扱の例は此の年代のものでは持ち合せてゐないが、次の元祿年間ものが留書狀留に見られる。即ち「元祿元年六月三日、一先年切支丹宗門ニテ申分相立御預ケニ罷在候尾州伊勢町目醫師壽庵娘令、病死候ニ付取置等之儀公義公邊奉行所へ御達有之、元祿二年正月二十九日、一尾州丹羽郡小口村百姓之内、金彌と申者切支丹宗門ニ面有之候處、去秋風と在所罷出久々不能歸候付右之趣公義切支丹奉行衆へ御達之處右金彌缺落之様子ニ相聞候間御家老より右之振合ニ證文認指出可然候其内村へ歸候ハ、其節早速可相達候

證文可被致、返進由遠藤伊豫守勝稻葉五郎左衛門殿御城附へ被申聞、元祿五年二月十六日、一尾州中島郡一宮村百姓切支丹本人助三三男本人同前之理兵衛去比病死ニ付例之通證文ヲ以て御城附ヨリ切支丹奉行へ相達」などあるが、尾張藩貞享四年の類族取締の記事は、實は憲教類典四ノ一六所載、同年六月の幕府の令とはほぼ同様であつて、幕府の令を尾張藩中に布告するに際しては、藩の事情に應じて多少の修補を爲したものであらう。先づ「江戸帳面者」と切支丹本人並類族の身分を説明し、此の監視には「所々庄屋并宗門組合之者の吟味を求め「缺落」の場合の届出を附加し、類族の範圍を明らかにし、死亡の際の届出を寺社奉行と「御藏入」は御代官並十人組の立會を規定してゐる。其後も寺社奉行と代官にて此を擔當してゐた事は、前掲諸書にも散見し得たところである。古義類族元祿三年の項に「一、元祿三年午年古切支丹本人轉及本人同前并類族之者一圓御糾、御代官服部十右衛門御用懸被仰付手代二人御預、一類族根帳一ノ帳、二ノ帳御國奉行より寺社奉行衆宛名にて出し候扣を以、類族懸り御代官預り右御用當時迄取扱候」とあつて、類族懸り御代官と云ふものが有つたことが知れるが、此の職が何時から設けられしか今知ることを得ないが、其より六十一年後即ち寶曆元年の事として、古義の記事に「三月類族見立之節、類族手代も御代官手代に立合相越候様」とあり、其のまた凡そ三十年後の事として、葉栗見聞集に「一、尾州郡方濃州郡方役所に前々より類門方を役名右御代官に兩人つゝ有之候處去る天明年中所附の役所に罷成候後額門方役名無之、其役所々々にて時

に應じて取扱よし」とあつて、其の後凡そ九十年に渡つて此の職が存続されてゐたことが知れる。此の頃の類族取扱方の相互の連絡に就いては、古義に「一享保十三年類族帳御國方扣帳之寫、寺社方へ遣し取扱方極有之由、一切支丹本人轉切支丹本人同前は十人組檢使御代官郡奉行之内立會死骸鹽詰郡奉行御代官證文御國奉行へ出し御國奉行より證文寺社奉行へ出す類族之者は支配方の手代斗相添相越、證文は同斷、但變死なれば類族にても御代官十人組罷越、一諸願之儀類族懸り御代官にて調べ支配之御代官郡奉行より願書御國奉行迄出し夫より寺社方へ申參候但毎年六月十一月出生縁組諸願等之有無類族有之村々へ支配之御代官より相觸、有無ハ類族懸御代官へ出す、一類族帳面、江戸へ出し候儀に付御代官手代江戸に下事」とあり吏事隨筆の同年の記事に「一切支丹本人并類族之者相果、御代官より書付出候得ば寺社奉行へ遣し候右奉行指圖次第取扱申候、一類族の者出生并名替縁組等願其外品替候節は寺社奉行任差圖取扱申候」とあり、先に示せる史料に散在するものに依つて見るも、従前に於てもほぼ同様のものであつたと思はれると同時に、其の後も先に示せる文明中の例の如く、多少の職制の變更はあつたと思はれるが、多くの差異が生じようと思はれない。實は法規に定められた類族が何時頃迄存続したのか、其を知る史料を持たないのであり、此の方面に關する史料は今迄も屢々發見されて來た事でもあるから、やがて其の點も明らかにされよう。

以上にて尾張藩に於ける切支丹類族取締を、幕府の取締方針が實際に於て如何に運用されたかの關心に於て考察する爲に、先づ類族の名義の變化、類族帳の存在の意義を考へ、尾張藩の史料を示して取締の經過を述べて來たのであるが、切支丹並類族の拿捕と召使の事については、上述拙稿に述べた場合が多いから省略する。